

【特別寄稿】 退職にあたってのメッセージ

有波 忠雄（前 筑波大学医学群医療科学類長）

医療科学類の前身である看護・医療科学類は2003年度に誕生し、私はその時から専任教員として遺伝子検査学などの科目を担当させてもらい、このたび、8期生の卒業とともに退職した。学類誕生の時から教員なので、教員としての1期生とも言える。1期生の卒業生は成長して多方面で活躍しており、それが学類にとって最大の財産であり、退職にあたって振り返ってみると、医療科学類も少しずつ発展してきていることが実感される。

色々な思い出がある。たとえば、最初の2年間にとりまとめを担当した卒業研究である。とりわけ1期生の卒業研究発表は思い出深く、いまでもその時の場面が昨日のように思い出される。



(2006年度 卒業研究発表風景 1)



(2006年度 卒業研究発表風景 2)

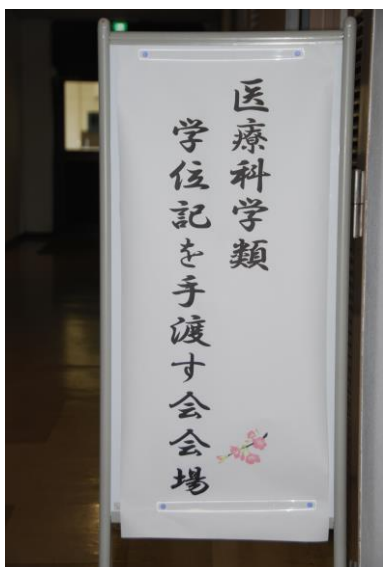
総合研究棟Dで行ったが、講堂のドアの外側で一生懸命に予行をしている学生さんの姿や質問タイムで教員と学生が質疑応答で盛り上がり、学生によっては対等に渡り合っていた姿に感動すら覚えた。討論時間が足りないのは残念だったが、案外それも良かったのかもしれない。授業、実習では、実験の待ち時間での実習室での学生とのとりとめの話、学生の将来を想像させ、楽しかった。



(2008年度 遺伝子検査学（遺伝子工学）実習風景)

在職中の最大の出来事はやはり2011年3月の東日本大震災である。私にとって学類長になって最初の年度であり、ちょうど春休みだったこともあり、多くの学生は校舎にいなかったことが幸いだったと最初は思ったが、学生の皆さんの安否の確認に時間がかかった。まもなく全員の無事が確認され、ほっとした。一方、実家が被災された学生もおられた。その年は正式な卒業式は取り止めたが、関係者や卒業生の努力で5期生に卒業

証書を渡すことができたのは幸いであったし、学類長として初めて卒業証書を手渡したことも手伝い、強く印象に残っている。



(2011 年春、医療科学類学位記を手渡す会 1)



(2011 年春、医療科学類学位記を手渡す会 2)

その年も含めて学類長として 4 回卒業式で卒業証書を手渡すことができた。いずれも思い出すと
なつかしい。写真を眺めて改めて願うのは、卒業生
のみなさんの充実した人生である。



(2011 年春、医療科学類学位記を手渡す会 2)



(2012 年春 医学群卒業祝賀会)



(2013 年春 医療科学類学位記授与式)



(2014 年春 医療科学類学位記授与式)

自分の研究室や専門分野に関しては、医療科学類が出来る前とできた後ではだいぶ違ったものになった。遺伝学研究の時代の流れもあったが、医療科学類が研究室の性質を一部変えた面もある。私の研究室の教員は基礎研究を目指しているグループに属していたが、その中であってより臨床を意識した研究に視点に移ったとでも言えようか。その象徴が新たに出来た職種である認定遺伝カウンセラーで、その資格をめざす卒研生も2人来てくれ、ひとは既に社会に出て活躍している。その他、多くの学生が卒研の研究室として選んでくれたことをとても感謝している。

学類ができた最初の4年間は看護・医療科学類であった。振り返るとこの時はまだ医療技術短期大学部の色彩、臨床検査技師養成の短大や専門学校の伝統を残していた。2007年度に医療科学類として学類が独立してからは、少しずつ学類の独自性について整備がなされてきた。私が学類長を勤めさせていただいたのは2010年度からで既に医療科学類になって3年が過ぎており、浦山前医療科学類長のもと、医療科学類の基盤が整備された頃である。学類長になって、全国の臨床検査技師教育の会議に出席することになった。専門学校の

悩みも伺った。国立大学の臨床検査技師教育機関の集まりである国立大学臨床検査技師教育協議会に出席してみると筑波大の医療科学類が特別な存在であることが実感された。臨床検査技師養成を前面に出していない点や大学院で検査技術科学の専攻がない点などである。名称を検査技術学ではなく、医療科学として学類を設計した先輩の先生方の意図をあらためて実感させられた。ところがカリキュラムの内容はそれにとまっておらず、他の大学とほぼ同じで専門学校のを基本としていた。いや、むしろ、カリキュラムの大綱化の流れを受けてよりフレキシブルなカリキュラムを組む私立大学より硬直した面もあった。筑波大学の特徴を追求し、発展させるにはどうしたらよいか悩むところであった。偶然、私の学類長在職中には、G30 留学生も含めて編入学入試資格の拡大と国際医療科学主専攻の設置によりカリキュラムの多様化が図られ、他の大学にない独自の路線を歩み始める時期に恵まれた。ミッション再定義という名のもとに、文部科学省による全国の国立大学の役割の再定義が行われたが、昨年は医療学類が属する保健系の分野の再定義が行われた。そこで医療科学類は英語名の医科学 (Medical Sciences)を中心とすることで認められた。医療科学類を創設した先生方の意図である方向でさらにすすむことのお墨付きが得られたともいえる。今後は医療科学類のますますの発展と卒業生の活躍を学外から楽しみにしたいと思う。

私は筑波大学に教員として採用される前に発達障害を中心に14年間臨床を行っていた。その過程で、発達障害の原因を追求するため遺伝学を学び、平成元年から筑波大学で遺伝医学の研究、教育に

たずさわってきた。大学入学時にはそもそも筑波大学そのものがまだなかったし、医療科学類の皆さんにこのようなメッセージを残して筑波大学を退職することになろうとは、まったく想像すらできなかった。学生の皆さんの人生がどのような展開になるか、自分の人生の予想外の展開も楽しみにしてほしい。

学生の皆さんにお願いである。私は、筑波大学を退職してからは再び発達障害や肢体不自由児、重症心身障害児者を主な診療の対象としている病院で診療に従事している。大学在籍中は非常勤で臨床の勘を失わないようにしていたつもりでいたが、フルタイムでこの仕事を再開してみると、大学にいた 25 年間はやはり臨床はアマチュアであったと申し訳ない気持ちでいる。今やっている仕事は、こどもが大学や就職、社会人になるための準備段階でのつまづき事を少なくすることである。その立場であらためて振り返ると大学在職中でももう少し学生の皆さんにきめ細かい配慮が出来たのではないか、という悔い、学生に申し訳なかった気持ちが残っている。学生の皆さんも困難な点があったら、躊躇せず相談してほしいと願う。相談すればなんとなることが多い。相談する姿勢が大事なのである。

いろいろな職種のスタッフと仕事をする私の毎日であるが、臨床検査技師のスペシャリティとしての仕事は不可欠であると共に、臨床検査技師が不足している事も実感している。社会での臨床検査技師の重要性をあらためて実感するとともに、医療だけでなく、福祉の世界でも活躍の場がある。関心がある方は、ぜひ遊びに来てほしい。



有波先生、お疲れ様でした。